

2021年6月
Press Release #1

ピピロッチェ・リスト：Your Eye Is My Island —あなたの眼はわたしの島—



【展覧会概要】

展覧会名：ピピロッチェ・リスト：Your Eye Is My Island —あなたの眼はわたしの島—

会 期：2021年8月7日（土）～10月17日（日）

開場時間：10:00～18:00（入場は17:30まで）

会 場：水戸芸術館現代美術ギャラリー

出品作家：ピピロッチェ・リスト

休 館 日：月曜日 ※祝日の場合は翌火曜日

入 場 料：一般900円、団体（20名以上）700円

高校生以下／70歳以上、障害者手帳などをお持ちの方と付き添いの方1名は無料

※学生証、年齢のわかる身分証明書が必要です

※一年間有効フリーパス → 「年間パス」2,000円

◎学生とシニアのための特別割引デー「First Friday」

→ 学生証をお持ちの方と65歳～69歳の方は、毎月第一金曜日（9月3日、10月1日）100円

◎京都会場の入場券半券の提示で当日券が200円割引！※1名様1回有効。招待券、招待状を除く。

他の割引とは併用できません。

主 催：公益財団法人水戸市芸術振興財団、京都国立近代美術館

後 援：在日スイス大使館

協 賛：クヴァドラ

協 力：株式会社長谷ビル、国立新美術館、森美術館、ユニバーサル・ビジネス・テクノロジー株式会社、サントリーホールディングス株式会社

助 成：スイス・プロ・ヘルヴェティア文化財団

企画協力：Hauser & Wirth、一色事務所

企画：後藤桜子（水戸芸術館現代美術センター学芸員）

ピピロッティ・リスト（1962 年スイスのザンクト・ガレン州グラブス生まれ）は、実験的な映像表現を探究するアーティストとして、1980 年代から現在に至るまでスイスを拠点に世界各地の美術館や芸術祭で作品を発表してきました。色彩に満ちた世界をユーモアたっぷりに切り取ってみせる映像と、心地よい音楽や空間設計によるリストのビデオ・インスタレーションは、国を越えて幅広い世代の観客を魅了しつづけています。

本展は、身体、ジェンダーとセクシュアリティ、自然、エコロジーを主題とした作品およそ 40 点で構成されています。身体や女性としてのアイデンティティをテーマとする初期の短編ビデオ、ヴェニス・ビエンナーレ（1997）や横浜トリエンナーレ（2001）で国際的な注目を集めた《永遠は終わった、永遠はあらゆる場所に》（1997 / 京都国立近代美術館蔵）、自然と人間の共生をテーマにパノラミックなスクリーンへと展開する近年の大型インスタレーションなど、30 年以上に渡り現代美術における映像のあり方に新たな可能性をもたらしてきたリストの代表作を紹介します。さらに、ベッドや展示室の床に敷かれたカーペットに身を預けて思い思いの姿勢でくつろぐ、食卓を囲むといったインスタレーションが、遊び心あふれる映像体験へと鑑賞者を誘います。リストが映し出すユーモアと色彩に満ちた世界に触れることで、人間の普遍的で切実なテーマを鑑賞者の心身とともに解きほぐす機会となるでしょう。

【作家プロフィール】

ピピロッティ・リスト（本名：エリザベス・シャルロッテ・リスト）

1962 年スイス北東部のザンクト・ガレン州グラブスに生まれる。2004 年からスイスのチューリヒを拠点に活動。

1980 年代にウィーンの応用芸術学校およびバーゼルのデザイン学校で商業美術や映像表現を学び、フリーランスで広報ビデオの制作に携わる傍ら、音楽バンドの舞台デザインや映像制作を行う。1986 年に自身を撮影した短編ビデオ作品《私はそんなに欲しがるの女の子じゃない》がスイスのソロトゥルン・フィルム・フェスティバルで受賞したことをきっかけに、ビデオ・アーティストとしての道を進むこととなる。1997 年には《永遠は終わった、永遠はあらゆる場所に》でヴェネチア・ビエンナーレ若手作家優秀賞（プレミオ 2000）を受賞し国際的な評価を獲得した。その 3 年後にはニューヨークのタイムズスクエアで 16 面のマルチビジョンによる《わたしの草地に分け入って》が上映され、また、ポンピドゥー・センター前広場（2007）やニューヨーク近代美術館（2008）でも大規模な映像インスタレーションを発表。2014 年以降はアメリカ、オーストラリア、イギリス、デンマークそして地元スイスの主要美術館で大規模な個展を開催するなど、その活動は世界から注目を集めている。

日本国内では、1999 年に京都国立近代美術館で《永遠は終わった、永遠はあらゆる場所に》が上映されて以来、2000 年代の主な個展「The Cake is in Flames：ピピロッティ・リスト」（2002、資生堂ギャラリー、東京）、「ピピロッティ・リスト：からから」（2007、原美術館、東京）、「ピピロッティ・リスト：ゆうゆう」（2008、丸亀市猪熊弦一郎現代美術館、香川）などで作品が紹介され多くの反響を呼んだ。また、瀬戸内芸術祭や PARASOPHIA: 京都国際現代芸術祭 2015 など芸術祭の委嘱作品として制作されたサイトスペシフィック*な作品でも知られ、その作品は原美術館（東京）、京都国立近代美術館、東京都現代美術館、金沢 21 世紀美術館（石川）などに収蔵されている。

※サイトスペシフィック：作品が展示される場所の特性を生かした作品

【展覧会の見どころ】

●初期ビデオ作品から最新の大型インスタレーションまで、30 年間にわたる主要作品を見せる国内 13 年ぶりの大規模個展

本展では 1980 年代から現在に至るピピロッチェ・リストの作品およそ 40 点を通して、30 年間にわたる創作を紹介。アーティストとしての道を進む契機となった短編ビデオから、鑑賞者の身体に働きかけ「知覚と感情の融合」を試みる近年の大型映像インスタレーションまでの主要作品を概観できる、日本では 13 年ぶりの大規模個展です。なお、展示構成は年代順やテーマ毎の明確な区分を設けず、作品同士の連関に沿って展示室を巡りながら、鑑賞者が視覚・聴覚・触覚などさまざまな感覚を通して作品に出会うことを意識したゆるやかな導線を設けています。

- ・目安の所要時間は 120 分（明確な始点終点のない作品を含む全映像作品の長さは 250 分）。
- ・本巡回展で初公開となる 2 作品を含むおよそ 40 点を展示

●ジェンダー、環境問題など現代社会が直面する切実な問題に、心もからだも緩めて対峙する

身体、ジェンダーとセクシュアリティ、自然、エコロジーなど社会的関心と共振するリストの創作は、既存のジェンダー規範やセクシュアリティに対する既成概念を転換するユーモア、人間と人間ならざるものの間で交わされる視点の移動、そして、視覚だけでなく全身を弛緩させて作品に没入することを促す演出など、映像に触れる私たちの心を解き放つことへと向けられています。

1999 年のインタビューでリスト自身が「どうしたら文化の伝統を全面的に否定せずに男女平等な社会を実現することができるのか。この問いかけは、人間にとってなにが自然で、なにが人工や文化なのかという複雑な問題へとつながっている」と語るように、ジェンダーや環境に関する問題は相互に結びついており複層的です。作品と鑑賞者の関係性をより柔らかにすることで、リストは対立・停止・硬直しがちなこれらの問題意識を解きほぐし、制度上のタブーや既存の観念を再考するよう促します。

●パーソナライズされた映像鑑賞体験をパブリックな経験へとひらく

5 センチほどの LCD ディスプレイから高さ 3.2 メートル幅 10 メートルを超えるマルチチャンネルのプロジェクションまで、リストによる多彩な映像表現を見せる本展は、寝転ぶ、見上げる、覗き込む、映像を浴びるなど、従来の映像展示とは異なる体験へと鑑賞者を誘います。四角いフレームからの解放を企てるリストの作品は、映画館の巨大なスクリーンとも、「時としてクリックだけで反射的に誤解や間違った情報が伝わる」モバイル端末とも違った、「集まることで個々の人間がひとつの共同体として繋がるような仕組みを見出す」ための展示空間における経験の共有を生み出します。

※本展タイトルに込められた意味

「Your Eye Is My Island—あなたの眼はわたしの島—」は、ピピロッチェ・リスト自身によって提案された短い詩のようなもので、そこには複数の意味が込められています。リストは、活動初期から一貫して人間の眼を「Blood-driven Camera＝血の通ったカメラ」と呼び、創作活動を通じて「眼」は重要なテーマとなってきました。また、「島」は複数の島で構成された日本という土地を示唆する言葉ともいえるでしょう。

リストによれば、他者の眼に映ること、まなざしを向けられることによって、私たちは自分自身の存在を発見し、また一方で誰かに対して視線を注ぐこと、心を配ることで、光さえ届かない「ブラックホール」からその存在を救出することができるのだと言います。この詩的なタイトルは、まなざしを介して各々の内面世界と外部的・集合的な世界とが出会う、展示空間におけるコミュナル（共同的）な体験へと鑑賞者を導きます。

【展示構成】

●四角いフレームからの解放。映像表現の新境地に分け入った《わたしの海をすすって》(1996)／《永遠は終わった、永遠はあらゆる場所に》(1997)

1990年代以来、リストはプロジェクターやモニターなど映像技術の特性を生かした表現に継続して挑んできました。波にたゆたう身体や色鮮やかな海中の様子に寂しげな楽曲を掛け合わせた《わたしの海をすすって》や、青いドレスに身を包んだ女性が花のかたち*の鈍器で車の窓ガラスを愉しげに叩き割っていく《永遠は終わった、永遠はあらゆる場所に》には、オーバーラップや万華鏡のようなミラーイメージなどが駆使され、ディスプレイやスクリーンから自らの表現や鑑賞者の知覚を解放しようとするアーティストの通底した関心を多分に見ることができます。

※モデルになっている植物はクニフォフィア

●不用品を作品にアップサイクルさせる《イノセント・コレクション》(1985-2023年頃)

1985年から現在に至るまで、リストは何も印刷されていない半透明または白色のプラスチックや紙製、木製の日用品や使い捨て容器を継続的に収集してきました。商品の包装や保護の目的で生み出されたこれらの製品は、ひとたび用途を失えばゴミとして捨てられ、環境負荷の山へと累積されてしまいます。リストはそんな不用品を「即席のダイヤモンド」として自らの作品に迎え入れ、《イノセント・コレクション》と題して世界各地の美術館で展示してきました。人間の都合で生み出され、捨てられる運命にあったこれらの素材が、無垢になって照明や映像に照らされる様は、それを見るリストを穏やかな気持ちにさせるといいます。

●共有空間でくつろぐ「アパートメント」の作品群

リストはこれまでに、ハンドバッグや水着、家具やベビーベッドなど日常的なオブジェを作品の筐体にしたビデオ・スカルプチャーを多数制作してきました。その遊び心あふれるアイデアは、近年では美術館の展示室をリビングルームのように体験できる大規模なインスタレーションに変容し、そこへ映像を介在させる展示方法へと展開しています。

本展においても、リストは鑑賞者が自らの意思で作品とどのような関係を結ぶのかに関心を寄せ、また集団での映像体験を通して、異なる個が集い、互いの存在に心を配りながら作品を楽しむことを促します。「人々は機械を過大評価しているきらいがあり、例えば家の天井にスクリーンを設置したり、色を塗ったりして、もっと自由でいいと思う」という言葉を自ら体現するように、さまざまなものをスクリーンやモニターへと拡張してゆくアーティストのユーモアにご注目ください。

●スクリーンへの没入体験から人ならぬものと人間の交わりを捉えなおす

空や光、水、泥、動植物や虫、色鮮やかな花々、そしてそれらに触れ、浸り、重なり合う人間—人間とその環境—という共通した主題を扱う《もうひとつの身体》(2008/2015)、《不安はいつか消えて安らぐ》(2014)、《マーシー・ガーデン・ルトゥー・ルトゥー／慈しみの庭へ帰る》(2014)の3作品では、視点がさまざまな主体へと流転することで複数種が織りなすつながりの世界へと鑑賞者を誘います。没入型の映像体験をもたらすパノラミックなスクリーンは、モバイル端末が普及したことでよりパーソナルになった映像と見る者の関係を、美術館という公共空間において鑑賞者同士が体験を共有することへと回帰させるというアーティストの狙いも含まれています。

●身体も視覚もリラックス。心身で感じるマスターピース《4階から穏やかさに向かって》(2016)

ベッドに寝転んだ状態の鑑賞者に「まるでモノの《睡蓮》を水の下側から見たような景色」を見せる《4階から穏やかさに向かって》は、リストの活動拠点であるチューリヒ近郊を流れる旧ライン川で撮影されました。リストは川にカメラを潜らせ、泥やさまざまな生物、朽ちた藻などで混濁した水のなかの世界や、そのような環境でもなお水草が陽光を受けて生み出す気泡のきらめきへと私たちの目を向けます。20年前《わたしの海をすすって》(1996)を撮影した紅海とは似つかない濁った水中の景色は、メランコリーとユーフォリア、悲哀と希望など相反する概念が混在した状態をほのめかすようです。ベッドに寝転び体を横たえる鑑賞形態は、呼吸や身体の重みや温もりを感じることで精神を落ち着かせる「自律訓練法」からアイデアを得て構想されました。視覚、そして全身を弛緩させることで鑑賞者をリラックスさせるこの鑑賞形態は、「知識と感情の融合」によってより深く作品の世界へと迎え入れます。

●映像表現における身体やセクシュアリティの表象に対する創作のモチベーションに触れる初期の短編ビデオ作品

学生時代に super 8 での映像制作を開始し実験映画などの影響を受けたリストは、1980 年代に撮影から編集までを自らの手で行うことができるという理由から、ビデオによる作品制作を開始します。スイス国内の映画祭などで高い評価を得た《わたしはそんなに欲しがり女の子じゃない》(1986) では、ザ・ビートルズの楽曲を引用し、人称を「彼女」から「私」に改変することで物語の主体を男性から女性自身へと転換し、また 1990 年代に急増したポルノに対する賛否の議論を受けて制作された《ピッケルポルノ／ニキビみたいなポルノ》(1992) では女性視点での性表現を試みるなど、いずれもパロディーによってジェンダー規範やセクシュアリティに対する既成概念を再考する遊び心が垣間見えます。上記 2 作品を含む本展覧会で紹介する初期の短編ビデオ 7 作品には、映像、音楽そして言葉を組み合わせた複合的な表現に対するアーティストの通底した関心がうかがえます。

※一部の作品に年齢制限を設けています

【関連プログラム】

※新型コロナウイルスの状況により内容が変更・中止になる可能性があります。料金について記載のないプログラムは無料。ただし参加には展覧会入場券の提示が必要です

■ 講演「Open My Glade—映像インスタレーションと観客のコレオグラフィ」

日時：2021 年 9 月 4 日（土）14:00—16:00

講師：星野太（美学、表象文化論）

会場：水戸芸術館 ACM 劇場

定員：80 名（要事前申込・先着順・8 月 8 日申込受付開始）

■ 鼎談「アーティストの視点でピピロッチ・リストを見る—I Can't Agree With You More!—」

日時：2021 年 10 月 2 日（土）14:00—16:00

講師：高田冬彦、百瀬文（アーティスト） 聞き手：丸山美佳（批評家、キュレーター）

会場：水戸芸術館会議場

定員：50 名（要事前申込・先着順・9 月 2 日申込受付開始）

■ 視覚に障害がある人との鑑賞ツアー『session!』

全盲の白鳥建二さんをナビゲーターに、見える人と見えない人が一緒に展覧会を鑑賞するツアー。

日時：2021 年 9 月 26 日（日）14:00—16:00

会場：水戸芸術館内

料金：1,500 円（展覧会の当日入場料を含む）

定員：5 名（要事前申込・抽選）

■ CAC ギャラリートーカーによる対話のプログラム

来館者と対話をしながら作品を鑑賞するツアーを担う市民ボランティア「CAC ギャラリートーカー」。昨年からは継続して行う掲示板や電話を介した非対面式による来場者との対話のプログラムを実施します。詳細後日発表。

■ アワアワしないアワー

お子様連れやケアの必要な方が鑑賞しやすいよう、お手伝いするスタッフが見守る時間を設けます。予約不要、詳細後日発表。

日時：2021 年 9 月 24 日（金）、25 日（土） 各日 10:00—12:00

【同時開催】 ※新型コロナウイルスの状況により内容が変更・中止になる可能性があります。

■ 夏のこらぼ・らぼ

身の回りの物を転用して新たなモノの価値を作るワークショップやドラッグクイーンによる読み聞かせなど、おとなも子どもも楽しめるプログラムを2週間にわたって実施します。

「徳本萌子ワークショップー光の糸で葉っぱと古紙を縫う」

開催日時：2021年8月20日（金）、21日（土）

※ほかに公開制作を予定しています。

「ドラッグクイーン・ストーリー・アワー東京による絵本読み聞かせの会」

開催日時：2021年8月22日（日）

「Ph.D.（フッド）ワークショップー時をかさねるクッション」

開催日時：2021年8月28日（土）、29日（日）

※いずれも申込制。詳細は、決まり次第当館ホームページ等でお知らせします。

■ 日比野克彦「HIBINO CUP」番外編

詳細は、決まり次第当館ホームページ等でお知らせします。

日時：2021年9月25日（土）時間未定

■ 日比野克彦「明後日朝顔プロジェクト2021水戸」開催中

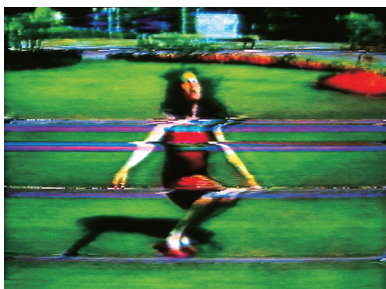
「明後日朝顔プロジェクト」は、朝顔の育成を通して、人と人、人とコミュニティ、そして地域と地域をつなぐ、アーティスト日比野克彦によるアートプロジェクトです。水戸では2005年以来、毎年、他の参加地域と苗や種を送り合い、また、地域の方々とともに苗植えやウッドデッキのペイント、種の収穫を行ってきました。今年は、新型コロナウイルス感染拡大防止のため、開催場所である水戸芸術館では規模を縮小して6月5日（土）に苗植えを行いました。また、ご応募くださった市民の方々のご家庭でも「明後日朝顔」を育てていただいています。当館での種の収穫は、10月16日（土）を予定しています。

期間：～2021年10月16日（土）

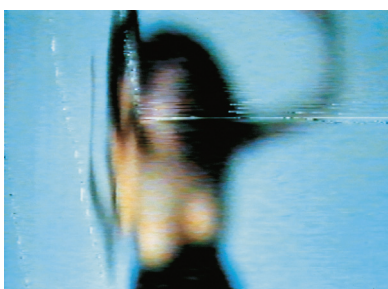
場所：水戸芸術館広場回廊2階

【図 版】 展覧会広報用にデータを貸し出しますので、ご要望の方は鳥居までお問合せください。

1



2



3



4



5



6



7



8



9



1. 《(免罪) ピピロッティの過ち》1988年、シングルチャンネル・ビデオ、サウンド（11分18秒）
(Entlastungen) Pipilottis Fehler [(Absolutions) Pipilotti's Mistakes] , 1988
Single-channel video with sound (11'18")
2. 《わたしはそんなに欲しがり女の子じゃない》1986年、シングルチャンネル・ビデオ、サウンド（5分）
I'm Not The Girl Who Misses Much, 1986, Single-channel video with sound, Sound 5"
3. 《わたしの海をすすって》1996年、2チャンネル・ビデオ・インスタレーション、サウンド／コーナープロジェクション（10分22秒）
Sip My Ocean (videostill), 1996, Two-channel audio-video installation/corner projection (10'22")
4. 《永遠は終わった、永遠はあらゆる場所に》1997年、2チャンネル・ビデオ・インスタレーション、サウンド／コーナープロジェクション（4分9秒、8分25秒）
クンストハレ・チューリヒでの展示風景、1999年、Photo: Alexander Tröhler、京都国立近代美術館蔵
Ever Is Over All (videostill), 1997, Two-channel audio-video installation(4'09", 8'25")
Installation view, Kunsthalle Zurich, 1999, Photo: Alexander Tröhler, collection of the National Museum of Modern Art, Kyoto
5. 《イノセント・コレクション》1985-2032年頃、
インスタレーション／白い紙、厚紙、プラスチック、発泡スチロール、ほか（ワーク・イン・プログレス）、
サイズ可変
The Innocent Collection, 1985–approx. 2032, Installation with white paper, cardboard, plastic and styrofoam and other materials (work in progress), Dimensions variable
6. 《マーシー・ガーデン・ルトゥー・ルトゥー／慈しみの庭へ帰る》2014年
マルチチャンネル・ビデオ・インスタレーション、サウンド／コーナープロジェクション、クッション、カーペット（15分14秒）
Mercy Garden Retour Retour (from the Mercy Work Family) , 2014
Multi-channel audio-video installation/corner projection, carpet and cushions (15'14")
7. 《マーシー・ガーデン・ルトゥー・ルトゥー／慈しみの庭へ帰る》2014年、
マルチチャンネル・ビデオ・インスタレーション（15分14秒）、
クンストハレ・クレムスでの展示風景、2015年、Photo: Lisa Rastl
Mercy Garden Retour Retour (from the Mercy Work Family), 2014, Multi-channel audio-video installation (15'14")
Installation view, Kunsthalle Krems, 2015, Photo: Lisa Rastl
8. 《忍耐》2016年、シングルチャンネル・ビデオ・インスタレーション／岩、ソファ、壁面に投影（12分46秒）
クンストハウス・チューリヒでの展示風景、2016年、Photo: Lena Huber
Die Geduld [The Patience] , 2016, Single-channel video installation, silent. Projection on erratic boulder, sofa and wall (12'46")
Installation view at Kunsthaus Zürich, 2016, Photo: Lena Huber
9. 《4階から穏やかさへ向かって》2016年
4チャンネル・ビデオ・インスタレーション／ベッド、枕（13分23秒、8分11秒、8分11秒）
オーストラリア現代美術館での展示風景、2017年、Photo: Ken Leanfore
4th Floor To Mildness, 2016
Four-channel audio-video installation. single and double beds with pillows (13'23", 8'11", 8'11")
Installation view at the Museum of Contemporary Art Australia, 2017, Photo: Ken Leanfore

全ての図版に下記クレジットが入ります

© Pipilotti Rist, All images courtesy the artist, Hauser & Wirth and Luhring Augustine

プレス向け内覧会のお知らせ

2021年8月6日（金） 14:00～15:30 受付開始 13:30

場所：水戸芸術館現代美術ギャラリー

出席者：後藤桜子（水戸芸術館現代美術センター学芸員）

※感染症の状況により、プレス向け内覧会の実施を見合わせる場合がございます。

※人数把握のため、ご参加を希望される場合は必ず事前にお申し込みいただきますようお願い申し上げます。また、ご来館にあたっては事前に当館 HP「新型コロナウイルス感染症予防のお願い」を必ずご確認ください。

【お問合せ】

水戸芸術館現代美術センター

〒310-0063 茨城県水戸市五軒町1-6-8 Tel.029-227-8120/Fax.029-227-8130 <https://www.arttowermito.or.jp/>

展覧会について：後藤桜子（学芸員）

教育プログラムについて：森山純子（教育プログラムコーディネーター）

広報・写真貸出について：鳥居加織（広報） e-mail:cacpr@arttowermito.or.jp

*詳細は公式ツイッター http://twitter.com/MITOGEL_Gallery でも配信いたします。

【記事掲載についてのお願い】

- 1) 掲載にあたっては、正式展覧会名称と会期の表記をおこなってください。
- 2) 写真を掲載する場合は、写真に添付してあるキャプション・クレジット等を正確に表記してください。
- 3) 誌面掲載する電話番号は、水戸芸術館代表番号029-227-8111をお願いいたします。
- 4) 掲載記事とVTRは、資料として保管いたしますので水戸芸術館現代美術センター鳥居までご送付ください。
- 5) 取材及び収録等の取材は、必ず事前にお問い合わせください。都合により取材に応じることのできない場合がございます。

【交通のご案内】

【JR】 東京駅（品川、上野発もあり）から常磐線特急で約72分～84分、水戸駅下車。駅北口バスターミナル4～7番のりばから「泉町一丁目」下車。降車後バスの進行方向に進み、すぐの交差点で大通り（国道50号）を渡り、そのまま真直ぐにお進みください。徒歩2分。

◎料金：特急片道3,890円／普通各停片道2,310円（2021年5月現在）

※ご予約・時刻表など詳しくはこちらをご参照ください。JR 東日本旅客鉄道 Tel.029-221-2836

<http://www.jreast.co.jp/>

【高速バス】 東京駅八重洲南口バスターミナルのりばから高速バス「みと号」（赤塚又は茨大ルート）で約100分、「泉町一丁目」下車、徒歩2分。切符は東京駅八重洲南口バス券売機、水戸駅北口バスチケット売場でお求めください。

◎料金：東京駅－水戸駅 片道切符2,120円。ツインチケット（2枚綴り回数乗車券4,000円）。（2021年5月現在）

※詳しくはこちらをご参照ください。茨城交通 Tel.029-251-2331 <http://www.ibako.co.jp/>

【お車】 常磐自動車道水戸ICから国道50号に下りて市街地方面にお進みください。約20分、国道349号との交差点「南町3丁目」（左手にみずほ銀行）で左折、2つ目の信号でまた左折してください。

そこから1つ目の信号を過ぎたところで水戸芸術館地下の市営五軒町駐車場のマークが見えてまいります。

◎駐車場料金：30分まで無料、1時間まで200円、以降30分毎100円／営業時間：7:00～23:00

※高速料金・ルートなど詳しくはこちらをご参照ください。

東日本高速道路「ドラぷら」 Tel.0570-024-024 <http://www.driveplaza.com/>